二次元ぷち文庫

宇宙狩人ミミライ

最後にして最初の地球人

草飼晃

表紙イラスト：みかん。

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『宇宙狩人ミライ　最後にして最初の地球人』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

宇宙狩人ミライ

最後にして最初の地球人

草飼晃
表紙／みかん。

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

マイニチ・ミライ

正義感の強い、宇宙連邦所属の宇宙鳥獣保護観察官。就任してまだ二年ほどだが、その熱心な働きと辣腕ぶりから、いつしか「宇宙狩人」と呼ばれ始める。

イーソ・ケアン

気弱で痩せ型の青年。辺境星域で農業をいとなんでいたが、タルドス星人に家畜ごと捕獲されてしまった。

タルドス星人

４本の腕を持つ凶悪なヒューマノイド型異星人。

「ああ、なんてひどい。かわいそうに」
罠の金具を外してあげた。
細い前肢が自由になると、短い毛で覆われている胴体をぶるっと震わせてから、小型の哺乳動物は草原の中へ逃げていった。
（よかった。折れてはいなかったのね）
自分の足元に視線を戻し、マイニチ・ミライは拳をぎゅっと握りしめた。
（密猟者だわ……こんな罠を仕掛けるのは）
草原惑星スピア。
ここは野生のスピア鹿の生息する唯一の惑星となっていた。絶滅しかかっているスピア鹿の重要度はAランク。
乱獲などもっての外だ。新しく通過した法案では、売買どころか研究という名目の飼育や単純所持でも違法。
（許せない）
罠を解体する。
「これで、よし、と」
立ちあがったミライの黒髪を、草原惑星の心地よい風が撫でた。
ふわりと揺れるミディアムの髪は、肩の上で外向きにカールしている。

意志の強さを感じさせる、細くて少し吊りあがり気味の眉。
口元は、密猟者に対する怒りにキッと引き結ばれている。
マイニチ・ミライはソル系の惑星テラ人の血を引く、20歳の宇宙鳥獣保護観察官だ。
今は26世紀初頭。
銀河系宇宙では、星間交易がさかんだった。
文明圏の富豪には希少生物の収集家が多かった。宇宙連邦が乱獲を禁じても、収集家からの多額の報酬を目当てに密猟をおこなう者が後をたたない。
そこで宇宙連邦は、宇宙鳥獣保護観察法を制定した。
試験をパスした者には、宇宙鳥獣保護観察官のライセンスが与えられ、連邦パトロールと同じように、光線銃の携行が認められる。
密猟者を狩る宇宙鳥獣保護観察官はいつしか密猟者たちから『宇宙狩人』と呼ばれて、恐れられるようになっていた。
「ん？」
ガサッという音に、うら若い宇宙狩人は振り返った。
茂みの向こうから、人影が現れた。
2人だ。
ヒューマノイド型だった。ただし腕は左右に2本ずつ。

（タルドス星人……！）
凶悪な星間種族として知られている。手には同型の罠や、回収カプセルを持っていた。
「動かないで」
光線銃を構えた黒髪の宇宙狩人を見て、２人の密猟者は一瞬ぎょっとした顔になった。しかし、それがすぐにいやらしい笑い顔に変わった。宇宙狩人の肢体の瑞々しい起伏を前にしての、性欲にあふれた笑いに。
全身をぴっちりと包みこむミライの銀色のスペーススーツは、女らしいふくらみをはっきりと見せてしまっている。
ぷりんともりあがった胸。
きれいにくびれた腰。
年頃の女らしい豊かな張りと丸みを持つ尻。
そこから太ももへとつづく曲線も若々しい、均整のとれた身体つき。
「聞こえないの？　動かないで。ことばがわからないの？」
宇宙連邦の共通語であるインターコスモで話しかけている。いくら相手が野蛮で科学の発達していないタルドス星人とはいっても、通じていないわけがない。
だが２人の密猟者は下品によだれを垂らしながら、ミライに向かって躍りかかってきた！

「こ、こいつら……ッ」
宇宙狩人に迷いはなかった。ライセンス所有の鳥獣保護観察官の場合、正当防衛なら万一致命傷を負わせても罪には問われない。
放たれた麻痺光線が1人の身体を貫き、そいつは倒れこむ。ところが、もう1人は意外に機敏だった。4本腕の巨体が迫ってくる。
「くっ……」
焦ってバランスを崩しながら撃ったミライの2射目は外れた。3射目を放つ前に、そいつは4本の腕でつかみかかってきた。
(そうはいかないわっ!)
瞬時の判断で光線銃を投げ捨てると、相手の腕の1本を逆にこちらからつかむ。
「えーいっ!」
勢いを利用してそのまま投げ飛ばす。ミライのかけ声の余韻が消える前に、そいつは後頭部を草原惑星の大地に打ちつけて気を失った。
素早く2人に重力錠をかけてから、操縦席そなえつけの超高速通信機で連邦パトロールに連絡をとろうと自分の宇宙艇に向かいかけた、そのとき。
がさがさ、と草をかきわける音がした。低いうなり声がつづく。
「ちっ」

舌打ちをする。
（まだ仲間がいたのね）
ふたたび茂みの向こうからタルドス星人が姿を現した。それも大勢だ。10数人はいた。解体された罠とマイニチ・ミライの容姿を見た密猟者たちの反応は、最初の2人とまったく同じだった。
「オンナ。ぐるるる」
「がるるる」
「牝だあ、牝」
ことばが聞き取れた。訛りはあるがインターコスモだ。ただし、知性を持つ生物とは思えないうなり声が混ざっている。
（けだものどもめ……！）
銀色スーツの宇宙鳥獣保護観察官は、先ほど投げ捨てた光線銃を拾いあげ、構え直す。
「く、こいつらっ⁉」
タルドス星人どもの動きはさっきの2人以上に敏捷だった。おまけに人数が多すぎた。何人かは光線銃で倒すことができたが、しかし、残りの奴らは、地面に倒れこむ仲間を見ても恐れる様子もなく襲いかかってくる。
飛びついてきた1人を身をかわして避け、かがんでの足払いで別の2人をなぎ倒したと

引に挿入させようとしてきた。
今度は周囲の異星人どもは文句を言い始めた。完全な上下関係ができているわけでもないのか。
「お前だけ、愉しむ、ずるい」
「貴重なテラ人。長くもたせる、いい」
「ぐるるる。そうだ、そうだ」
結局説き伏せられて、そのタルドス星人は残りのペニスをそそり勃たせたまま、引き下がった。
もっとも、それでミライが解放されるというわけではなかった。休息が与えられるわけでもなかった。
「いやあ、気持ち悪い……っ」
とりあえず女性生殖器だけは使われなくなった、というだけのことだった。
「ぐるるる……やわらかい」
「あたたかい。なめらかで、どこにさわってもかたちがやらしい」
「これこそオンナだ」
「ひ……ひいっ。やだっ」
すぐにまた異星の岩山の中の牢獄に、妙齢の宇宙狩人の悲鳴がこだまし始めた。

えっちシーン試し読み ここからスタート!

「やだあ、やだあ……さわるな、さ、さわるなっ……あああ、気持ち悪い」
自由のきかない20歳のほどよく発達した肢体に、異星人どもの指や舌や亀頭が這い回る。爬虫類の皮膚みたいに硬くザラついた手のひらや指腹に擦られて、不快なだけなのに、肌自体は湿りや熱を増していく。
臭い唾液でとろとろに濡れた舌や、カチカチに隆起したペニスの先にねぶり回されるうちに、乳房の奥や下腹部の芯のあたりがぴりぴりと甘ったるくしびれ始めた。
（そ、そんなことは、やめて……っ）
腹にも背中にも、まだスペーススーツの生地はかなり残ってはいた。ただ、鉤爪が触れたところからさらに裂けつつあった。
ぐにゅ……その鉤爪をそなえた指がスーツの残骸越しに、ぷりんと実ったおっぱいを握りしめてくる。
「う、胸……やだあ」
まさぐられる刺激で勝手に硬くなってきた乳首。それが葡萄果実をつまむみたいにクニュンと生地ごと、指と指で挟まれる。
「い、いやあ、痛い……さわらないでッ」
そいつは興味深そうな顔で、胸のささやかな屹立を弄びつづける。それを見ていたもう1人が、もう片方の剥き出しの乳房に口を寄せてきた。

「や、ああ」
体験したことのない疼きが閃光をともなって、胸の豊かな実りの奥にはしる。
「や、いやああ、く、口で、つ、つまないでっ……ぅはああん」
悲鳴には甘さが混ざりつつあった。強引に乾いた膣をペニスでこじ開けられるのとは違って、敏感な若い女体を舌やら性器やらで擦りあげられている。
「しゃぶる。早くしゃぶる。早くしろ。ぐるるる」
ミライのあごと髪をつかんで、別の1人が猛りきったペニスを咥えさせようとしてきた。
(や……いや、よ、ぜったい!)
「ぐるる。このぴちぴちオンナ強情」
テラ人宇宙狩人が命令をきかないとわかると、そいつは鼻をつまんで口を開かせ、無理やりにねじこんできた。臭くて大きな陰茎が苦みといっしょに口に侵入してくる。
(くっ、くやしい……こんな)
あごに力を入れてみた。しかし異星人の男性器は材木みたいに硬かった。歯型くらいはついたかもしれない。けれど相手は痛がるそぶりは見せなかった。ちょうどよい刺激になったのか、ぶりゅっ、ぶりゅっ、と射精を始めた!
「ぐふうっ……っ」
抜き出させることができない。肉棒は熱くて臭い液を放出しつづけた。どうすることも

できずに、囚われの鳥獣保護観察官はそれを胃袋に送りこむ。吐き気といっしょにザーメン臭がぷはっと鼻孔から吐き出された。逆流してきた少量の精液が、ペニスを含まされたままのくちびるの端からとろり、と垂れる。

それを見て他の奴らの興奮も一気に高まったようだ。

（ひいい……やだあっ、いっせいに、こ、擦りつけないでえっ！）

スーツの上で、あるいは、裂け目から入りこみ素肌の上で……。

（いやだあ……ッ！）

成熟したての20歳の肢体に愛撫をくわえながら、男性器はいっせいに欲望の濁液を噴出させた！

（く、臭くて、重くて、どろどろしてるっ……）

ぶちゅう！　ぶりゅう！　どくどくっ！　だくだくどくっ……四方八方からみだらな噴出音が起こり、大量の子種汁がすらりとした女体を覆っていく。

一部は跳ねかえって飛び散り、一部はそのままぬるぬると素肌やスーツの上を這ったあと、垂れ落ちていく。カールした黒髪の上をすべって先端からぽとりと肩の上にも落ちる。先ほどとは比べものにならないくらいの強い精液臭がつーんと立ち昇り、ミライの意識を現実から遠ざけていく。

（……に、匂い……強すぎ……気が遠くなる……）

だが、ほとんどの異星人はまだ1本目のペニスで射精しただけであった。
つづけて同じように、今度は2本目のペニスが宇宙狩人の身体に擦りつけられる。口の中を責めていた1本は引き抜かれ、代わりに別の1本がやわらかなくちびるを割ってきた。ねばった液が喉や鼻腔に詰まっていてろくに息もできない。
（も、もうだめ……わたし、こんな奴らの体液を浴びながら……窒息してしまう）
そう思った、そのとき。
ぐにいっ……腹のあたりに擦りつけられていたペニスが、ぬめる精液で滑って、ミライの下腹部に触れてきた。
「や、や、やあぁん！」
ほぼ同時に喉近くまでペニスを突きこまれていたが、うら若いテラ人は吐き気を感じるゆとりもなかった。莢（さや）に守られた小さな肉真珠が、滑ってきた亀頭でツン、と押されていた。左右の乳首を同時に指や口でクニクニと責められる刺激がそこにくわわった。性経験のなかった20歳の娘には、これはひとたまりもなかった。
（な、なに……？　痛いのに、しびれて、あ、あ、あ、こ、こんなの、知らない……ッ！）
「感じているのか？　ぐるる。こうか？　これがいいのか？」
「ぃや、ぃやあっ！」
な、なにか、しびれて、身体が中から浮いて……？

「んんッ！　くふぅぅ！」
密猟者のペニスを咥えさせられてろくにことばも出せない状態のままで、ミライの腰は弾むようにビクビクとのたうった。10数人のタルドス星人に群がられたままその場で勝手にくねっていた。
「そんなにっ、ざらざらで……されたらっ！」
びくんっ。びくんっ……クリトリス擦りによる未経験の荒波はなかなか去らない。逆に窒息の恐怖も、破瓜の痛みも、鋭い激流の前にはもう遠ざかっている。
涙がつーっと頬を伝う。
なんの涙なのかはミライ自身にもわかっていなかった。
「ぐるる。見ろ」
「この牝テラ人、イッている……のか？」
「そのようだ。気持ちよさそうにビクビクして……ぐるる」
取り巻いているタルドス星人どもは、その涙を見て下卑た笑い声をあげた。プレミア価格のテラ人オンナでもしょせん牝は牝だ、などとあざけっている。
一方、妙齢の宇宙狩人は、
「あうっ、あう、うう……っ」
びくっ！　びく、びくっ……！

のひとことで緩んでしまう。
ぐっ、
「ぁあっ」
股を拡げられて、思わず上ずった声を出してしまった。
（は、恥ずかしい……っ）
見られていることも。声をあげてしまったことも。
ミライの股間。
生え揃った陰毛が、ゆるやかな白い肉土手を飾っている。肉びらはこころもち厚め。すでに、くちびるや乳首に受けた刺激だけでふっくらとその身を立ちあげて、かすかに中身をのぞかせていた。
むんっ……と肉びらの挟間からどこかフルーティな牝臭が洩れ出していた。
顔を寄せてきたコスギが、それを吸いこんでいる。
（やあっ……恥ずかしい……っ）
ところが青年は、ミライにとっては信じられないことに、もっと恥ずかしいことをしてきた。
れろり……と舌が、肉びらと肉びらの間から、ひそやかな粘膜を舐めあげた！
「ひゃ、ひやっ、いったい、なにを……」

えっちシーン試し読み ここからスタート!

「ミライ、きみ、あいつらに無理やり、乱暴されたんだろう？　ぼくが舐めて、きみの傷を癒してあげたいんだよ。唾液には殺菌成分があるんだ。病みあがりのきみには感染症の危険がある。健康な妊娠のために、まず消毒が必要だと思う」
「えっ？」
冗談を言っているのかと一瞬思ったが、コスギは真剣な顔をしている。
「う……わ、わかった、わ……」
拒める雰囲気ではなかった。
しっとりとした舌先にぺろりぺろりと撫でられただけで、女肉は桜色からぐっと赤みを増し、同時にじとりと、唾液以外の湿りも見せ始める。
れろり、れろり、れろり、れろり……。
「……ぁん……ぁぁんっ」
舌を使われているうちに、れろり、という音がだんだん、ねちょり、ねちょり、ねちょり……に変わってきた。そしてコスギの舌先に、白っぽいとろみのある汁がまといついていく。
「もう少し、中を、消毒して、みるよ」
「え。ちょっと、待って……ひゃぁぁんっ」
舌先が肉裂の奥に潜りこんできて、たまらずミライは鋭い声をあげてしまった。びくっ

びくっと腰が弾んだ。意外と筋肉をたくわえていたコスギの腕。かかえこまれた太ももが、くびれた腰の動きにあわせるようにうねってしまう。もうミライは自分でもどうにもならない。

（ど、どうしよう……感じすぎちゃってる、わたし……舐めてもらってるだけで、こんなんじゃ、どうしよう……いやらしい女だって思われちゃう……）

しかし肉粘膜を舌でえぐられる喜悦には、腰や太もものうねりは収まるどころか、激しくなっていく一方だった。ぴりぴりとした快感は、タルドス星人たちに弄ばれていたときにも一度感じたものだった。でもあのときは、こんなにあたたかい気持ちにはならなかった。

「はぁあ……はぁあ……ぁぁあ」

もう、口なんて閉じていられない。目はずっと潤んだまま。顔もずっと火照りっぱなし。顔どころか、なんだか身体中が熱く火照っている感じだった。気がついたら全身に汗が浮いている。それに自分の股間から立ちのぼる熟れたフルーツみたいな匂いがさっきよりずっと濃くなっている……。

（愛してもらうのって、こんなによかったんだ……）

でも。

いつまでも相手に主導権を握らせているのも、なんだかくやしい気もする。

「コ、コスギ。わ、わたしも、してあげる……」

思いだした。タルドス星人どもに自分がどんなことをされたか、を。コスギはまじめな男の人だけど、ひょっとしたら、こうしてほしいって思っているのかもしれないわ……。

がばっと体勢を入れ替えて、実った乳房と弾力のある尻の持ち主は全裸のまま、コスギの前にひざまずいた。

「あ。ちょ、ミライ……」

「動かないで」

あいつらのを咥えさせられたりもしたけれど、まだ今、そこまでする勇気はミライにはなかった。指で触れてみるだけでせいいっぱいだ。それでも、相手の腰の端切れを降ろして、顔を出した肉棒に指で触れ、そっと擦ってあげるだけで、

「くわっ、ミ、ミライっ」

洞窟内にひびくような声を青年はあげた。薄い包皮をするすると剥くと、あのタルドス星人のものを思いださせるような亀頭が姿を現した。一瞬だけ恐怖感をおぼえた。

でも色が新鮮なピンクだった。あいつらとは違う、と思い、ホッとする。

ただ、長さだけなら密猟者たちより上かもしれなかった。指腹でくにっ、と擦ると、またコスギは裏返ったような声を出す。同時に亀頭はいっそうふくらんで、透明な汁をとろりと吐き出した。

「ミライ、き、き、気持ちいいよ……きみの指、すごいよ……」

「かっ、勘違いしないでね、コスギ。わ、わたしだって、テラ人の子孫をつくる準備のために、してるんだから。べ、別にあなたのためにしてるわけじゃあ、ないんだから」
喜んでもらってうれしいのに、気持ちをまだうまく表せない。
「ミ、ミライ、ごめん、ぼくは、もう、我慢できない。きみの中に入りたい！」
「きゃんっ」
また形勢逆転だった。
ふたたび仰向けにさせられた。20歳のやわらかな肢体の上にテラ人青年が覆いかぶさってきた。いつも冷静だった青年の顔が今は必死そうだった。その顔を見てあらためてミライは、この人にこの身をまかせよう、と思った。
ぷりぷりの媚粘膜の入口の近くを何回も亀頭がたてに往復する。タルドス星人がやったような、挿入のために勢いをつける動作ではなく、単に場所がよくわからないようだった。
「コスギ……もう少し、下」
「こ、ここ？」
ぐにゅんっ……と先端が少しだけ入りかけたが、しかし。そのまま外へすべり抜けてしまった。それだけの刺激でも、まじめで学究肌の若い男性にとっては気持ちよかったのか、亀頭の先から白っぽい精液がぶじゅっと噴き出した。
「うわ」

「コ、コスギったら、もう？」
かわいらしい、と思う。あのおそろしいタルドス星人とはやっぱり違う。なんだか安心するわ、と思う。でも……これでは妊娠できない。
「もう1回、できるかしら？　コスギ」
こっそりため息をつきながら、わたしがいけないのかもしれないわ、とミライは思った。コスギはやさしすぎるから、あのタルドス星人のような強引な挿入はぜったいにしてこない。それなら、もっと、わたしの方から協力してあげなきゃ。
（でも……わからない。どうすれば）
そう思っていると、不慣れな青年の方が提案してきた。
「ミライ。今きみが息を吐いたとき、少し、拡がったように見えたから……もう1回、深呼吸してみてくれないか」
「え、ええ」
言われたようにやってみる。
深く息を吐いた瞬間、コスギはいきり勃ったままのペニスの位置をあわせ、腰を使ってそっと、あてがってきた。でもまだ戸惑っている。
「へ、平気。あなたに……コスギに、わ、わたしをあげる。全部あげる。だから……だから遠慮なんかしたら、承知しないから」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/